

森鷗外の『普請中』をめぐって

—— その成立の背景 ——

山 根 宏

- I. 作品の位置づけ
- II. Lingner と Dresden 万国衛生博覧会
- III. 鷗外と Dresden
- IV. 渡辺参事官が会ったのは「エリス」か

I. 作品の位置づけ

鷗外とドイツといえば誰もが思い浮かべるのは『舞姫』（明治23年）を始めとする初期の「ドイツ三部作」であろう。留学から帰った直後に書かれた作品群で、どれもドイツを舞台にしている。しかしその後の鷗外の文学活動は翻訳が中心となったり、歴史小説さらには史伝へと領域が広がったりして、いつしかドイツあるいはドイツ体験が影をひそめた観がある。それでも、注意してみると、後年のある時期に、初期の三部作ほどではないがドイツ体験の痕跡が見られる作品がかなり集中的に書かれていることに気づかされる。その最初は日露戦争に従軍した際に戦地で失った軍服のボタンを詠った詩、「ほたん扣鈕」であろう。「エポレット かがやきし友 / こがね髪 ゆらぎし少女 / はや老いにけん / 死にもやしけん」とドイツ時代を偲んでいる。その「扣鈕」を収めた『うた日記』が刊行されたのは明治40年である。その後、『普請中』（明治43年）、『妄想』（明治44年）、『かのやうに』（明治45年）とドイツ体験を背景とする作品が続いて書かれており、この時期にはそうした作品群が「後期ドイツ三部作」と呼びたくなるほど集中している¹⁾。なぜこの時期にそうした作品が集中しているのか、それらを通底するテーマは何か、など興味をもたせる現象ではあるが、ここでは「後期ドイツ三部作」の全体ではなく、鷗外のドイツ体験ともっとも深く関わっている『普請中』を取り上げ、その成立の背景を探ってみたい。

『普請中』の内容は、昔ドイツに留学し、今は官吏になっている渡辺参事官が、かつてのドイツ時代の恋人と東京で会って、再会の喜びもないまま別れるというものである。小品ではあるが論じられることがないわけでない。例えばドナルド・キーン『日本文学の歴史』第11巻は『普請中』を取り上げて、次のように論評している。

『普請中』（1910年）は、東京の西洋ふうレストランでの日本人の男とドイツ女性との短い邂逅^{かいこう}を述べている。女は明らかに、ドイツ留学中の男の恋人だが、二人の逢瀬^{おうせ}を取り巻く状況は、ドイツのときとは大違いである。「キスをしてあげても好くつて」と聞く女に、男は素っ気なく「ここは日本だ」と答える。その瞬間に、給仕がドアをノックもせずに入ってくる。ノックという西洋の礼儀を知らない給仕と、日本という社会の約束にうといドイツ女と一そこに東と西の世界の差が象徴される。

制服の給仕が、個室の中にテーブルをはさんで相対する二人にシェリーを注ぎ、メロンの皿を出す。その西洋料理屋は、折りから「普請中」である。日本は「西」にも属さないし、かといって、古くさい日本の名残り^{なご}をとどめて壁に掛けられた無味乾燥、寸足らずの掛軸^{かけじく}によって代表される「東」でもない。普請中一まさに日本そのものが普請中なのである。それは、あたかも半成の家さながらに、二つの文明を無神経なまでにごったまぜにし、かつての恋人同士が気づまりな再会をするにも似た不安定のうちに、寄せ集めている²⁾。

キーンはここで『普請中』を翌年の『妄想』さらには「五条秀磨」ものへとつながる一連の作品、ドイツ体験の上に立って日本の現状を批判的に見る文明論的作品群の端緒に位置づけていると言っている。『普請中』に関連して三好行雄が、「観念小説という呼び方はふさわしくないにしても、おなじく、一種の文明批評をとまなう作者の醒めた認識がプロットの軸に据えられていて、状況を抽象する観念の動きに沿って小説の形がととのえられているのは事実である」³⁾と述べたのもキーンと同じスタンスと言えよう。

これらはいずれも『普請中』以後の鷗外の文学活動を踏まえての位置づけであるが、そうした後年の作品と関連づけていない論評に目を向けてみよう。例えば、『普請中』が発表された直後に阿部次郎は次のように書いている。

三田文学の「普請中」（森鷗外氏）は今月の小説中の圧巻である。書き方は例によつて行届いてゐる。一篇を貫く気分は冷たい淋しい底にも一道の精気があつて読者の心に迫るものがある。一体此人の作には常に一種の悲調を帯びて居るが、それは道楽半分に、見栄に淋しがるのではなく、淋しいなどとは一言も言はずに何気なく話して行くその調子に淋し味が沁み込んでゐるのである。あの位の年配になつたら本当にこんな気がするものだらうかと思はせる淋し味である。現今の日本に対する皮肉や人生其物（及自己）に対する皮肉がキビキビと而も態とらしからず現れてゐる。更らに「舞姫」の作者が此「普請中」の作者になつたかと思ふと、人生は淋しいものだと思ふ⁴⁾。

阿部もキーンや三好と同じくこの小説のもつ文明論的な側面を見抜いているが、それに加えて、先の二人が触れていない点にも言及している。それは『舞姫』との関連である。阿部は一方にエリスと豊太郎の恋愛をおき、他方に渡辺参事官とかつての恋人との間のあまりにも寂しい交情あるいは感情のすれ違いを並べて比較している。この時点では『舞姫』はもう20年も昔

の小説であるが、それでもここに持ち出されてくるというのは、鷗外といえば『舞姫』を思わずにはいられないほど、この小説の衝撃が大きかったことを雄弁に物語っている。

以上、『普請中』を文明論的なテーマという観点からとらえる見方を並べてみたが、『普請中』をまったく別の観点から、すなわち渡辺参事官の昔の恋人に、鷗外自身の恋人を重ねる評家もいる。その昔、留学を終えて帰国した若き日の森林太郎を追って、一人のドイツ人女性が日本にやってきたという、いわゆる「エリス事件」が今では文学史の常識になってしまっているので、それを知っている今日の読者にとっては、渡辺参事官の恋人に「エリス」を重ねずに読むほうが困難であるかも知れない。なにしろ二人が会っている場所が築地精養軒であり、ここは20余年前に来日した「エリス」が1ヶ月ほど滞在したホテルなのであるから舞台が整いすぎている。「エリス」を説得して帰国させる役割を主として演じたのは林太郎の妹喜美子と結婚したばかりの小金井良精で、連日のように築地精養軒に足を運んだが、時には林太郎と「エリス」が二人だけで精養軒で会うこともあったらしい⁵⁾。

この渡辺参事官の恋人に「エリス」を重ねる読み方のもっとも早い例は鷗外の娘、小堀杏奴が昭和10年に書いた『母から聞いた話』（岩波文庫『晩年の父』所収）ではないかと思われる。その中で杏奴は『うた日記』に収められた『拍鈕』^{ほたん}を引いて、「こがね髪 ゆらぎし少女^{おとめ}」が『舞姫』のエリスのモデルであろうと推測し、「小説『普請中』はこの女に逢^あったものとして書いた父の空想の作であろう。」と述べている⁶⁾。小金井喜美子の岩波文庫版『鷗外の思い出』に解説を書いた森まゆみも「行きずりの身分違いの恋、そう思い込みたがった家族に反し、鷗外その人は生涯彼女を忘れず、文通もした形跡があり、のちに、小説「普請中」にも彼女の姿を形象した⁷⁾と何の疑いもなく断定し、山崎国紀は「鷗外はエリス残像をまさぐり、あの日のエリスの表情をもとめながら『普請中』を描いたのである」⁸⁾と書いている。

このように、渡辺参事官の昔の恋人に「エリス」を重ねる見方のほうが今日ではむしろ普通になっているように思える。その極めつけは小堀桂一郎であろう。かなり詳しく説明しているのでここに引いておく。なお、小堀は漢字を旧字で表記しているが引用に当たっては新字に改めてある。

リルケやアルテンベルクに共感し、「昂」の青年達の眼を意識しつつ『青年』を書き出したことで、鷗外は一寸した「若返り」を経験した。そのせいで一言へば、少々うまくつじつまを合わせすぎた推論になるかも知れぬが、明治四十三年の五月半ばに彼は『普請中』（「三田文学」六月号掲載）を書いてゐる。これはもちろん作り話である。もしいま、昔恋人だつたドイツの女が自分を尋ねて日本にやつてきたら一、といった空想を描いて、それをまた鷗外一流のやり方で脳裏に処理してみた結果を書いてみたのである。実際にこのやうな空想が鷗外の脳裡を過つたことは一再ならずあつたことと思ふ。その空想に対してやはり鷗外は<ここは日本だ>を腹中に繰返し、<本当のファイリステルになり済ましてゐる>と拒絶の表情をくづさずに答へたことであらう。これもまた鷗外が自ら好んで描いた自画像であるが、それと同時に、そこに何となしに寂しさと物足りなさの気配が漂つてゐることも見落とすわけ

にゆかない。おそらくこのそこはかたない寂寥の情の故に、読者はこの短篇に、生身の人としての鷗外の衷情を感じ、好意を以てこの作品を読むことができるのであらう。なほ蛇足に類することだが、『舞姫』の主人公の恋人はうすい金髪に碧眼だが、渡辺参事官の昔の女はブリュネットで褐色の大きな眼だといふことを、何か意味あることのやうにあげつらふのは無用の穿鑿である。作者が「三田文学」の初校ではくゲルトネルプラッツの芝居がはねて・・・>と書いてしまったのを、次号でくチェントラルテアアテルがはねて、ブリュウル石階の上の料理屋の卓に・・・>と訂正し、くヨオロツパの記念も段々薄らいで行く>と幾分感傷的に書き加へたといふことなどもあつたが、これもミュンヘンのゲルトネルプラッツとドレスデンのブリュール・テラッセが同時に出てきては話が合わないという地理的訂正を加へたまでのことである。実際の情事の記憶を喚び起しての正誤であるかなどと憶測すべき限りではない⁹⁾。

ここで小堀桂一郎は無前提に、鷗外が恋人「エリス」のその後を想像して造形したのがこの女であると主張している。だからこそ、金髪であるはずの「エリス」がブリュネットになっているのは何か意味があるというのではない、と先回りして断り、「少々うまくつじつまを合わせすぎた推論になるかも知れぬが」と腰の据わらない書き方しかできなかつた。こうした強弁は、しかし、小堀が自説に確信を持ってないことの現れのように筆者には見える。小堀は髪の色の違いを気にしているが、筆者がそれ以上に強く違和感を感じずにはおれないのが、女が漂わせている雰囲気である。渡辺参事官の恋人がふりまくコケットリーを鷗外は「エリス」に感じていたのであらうか。あるいは、20年という歳月が「エリス」をコケティッシュな中年女に変えたというのであらうか。『舞姫』のエリスとの違いはあまりにも大きいといわねばならない。

小堀桂一郎のように『普請中』を「エリス事件」の後日譚と見ようとするなら、他にもいくつか答えなければならない疑問が残る。例えば、なぜこの時期に『普請中』が書かれたのか。小堀もさすがにこれには自信がないようであるが、その執筆の動機は小堀がしたように「若返り」で説明できるものではあるまい。かつての恋人にはなぜコジンスキーという同伴者がいるのか。しかも女と渡辺との会話から察するにこのポーランド人のことは渡辺は前から知っているようなのである。女が今は歌姫になっているのはなぜか。エリスを舞姫に設定した鷗外がここでは歌姫に変えたともいうのであらうか。「エリス」を念頭において女が書かれたとすれば、二人がドイツで会ったのはBerlinとするのがもっとも自然である。それなのにBerlinではない場所を選んだのはなぜか。そしてその際、うっかり München の Gärtnerplatz の劇場と Dresden の Brühl'sche Terasse をつなぐという間違いを犯し、前者を消すことで最終的に二人の逢瀬の場を Dresden にしたのはなぜか。これは大方の読者にとっては気づくこともない些細な間違いで、後日、単行本として刊行される際に訂正すればそれで済むものであらうに、ただちに次号の『三田文学』で訂正せずにおれなかつたのはなぜか。小堀の論はこうした疑問のどれにも答えてくれない。

こうまで疑問が出てくるのであれば、渡辺参事官が会っている女は「エリス」だと断定する

小堀の説は、最初から誤った前提に立った思い込み過ぎないとは考えられないだろうか。もしかすると「ブリュネット」の一語は、ここでは「エリス」とは別の人物がイメージされていることの象徴であるかも知れないのだ。そうだとすると、たしかに築地精養軒という舞台は同じであるが、「エリス」ではないまったくの別人が登場していると考えほうが自然であろう。

「エリス事件」を知らなかった阿部次郎は、渡辺参事官の恋人に『舞姫』のエリスの後の姿を見るという過ちを犯さずに済んでいる。阿部は恋愛に向ける鷗外の視線の違い、すなわち『舞姫』では恋愛による感情の激しい動きを描き、『普請中』では日常を微動だにさせることのできない恋愛の寂しい結末を描いたというその落差を指摘しているのであって、「エリス」の変容に愕然としているのではない。むしろ鷗外自身も、読者が「エリス事件」を知っていることを前提には書いていないはずである。だとすればわれわれも「エリス事件」をひとまず脇に置いて『普請中』を読み直す必要があるだろう。

II. Lingner と Dresden 万国衛生博覧会

日記によると鷗外が『普請中』を書きあげたのは明治43年5月14日のことである。その前後の記事を読むと、繰り返し出てくるドイツ人の名前があることが目を引く。Lingner である。この名前が最初に出てくるのは5月6日で最後は6月8日であるが、Lingner に関わる日記の記述を並べてみよう。なお鷗外の日記や作品からの引用にあたっては、「鷗外全集 全三十八巻」(岩波書店、昭和46年)を底本とし、漢字は新字に改め、引用の後に当該の巻数とページ数を示すこととする。

- ・明治43年5月6日(金)
「独逸人 Lingner、Günther の二人来訪す」< 35 巻 486 ページ >
- ・明治43年5月9日(月)
「Lingner、^{ママ}Guenther の二人を築地精養軒に招く」< 同上 >
- ・明治43年5月14日(土)
「北里柴三郎電話にて博覧会経費の事を言ふ。Lingner を大臣の許に伴ひ行く。(中略) 普請中を草し畢る。」< 同上 >
- ・明治43年6月8日(水)
「Lingner 来て別れを告ぐ」< 35 巻 489 ページ >

5月9日にLingnerとその同伴者を招待したのが築地精養軒であり、その5日後に『普請中』が書かれたのはたして偶然だろうか。この記述で見ると、Lingnerは日本に在住しているのではなく何らかの目的をもって日本を訪問し、1ヶ月あまり滞在したものと思われる。Lingnerとは何者でその目的とは何であったのか。

筆者がインターネットでLingnerを検索したところ、思いがけないことが判明した。検索でか

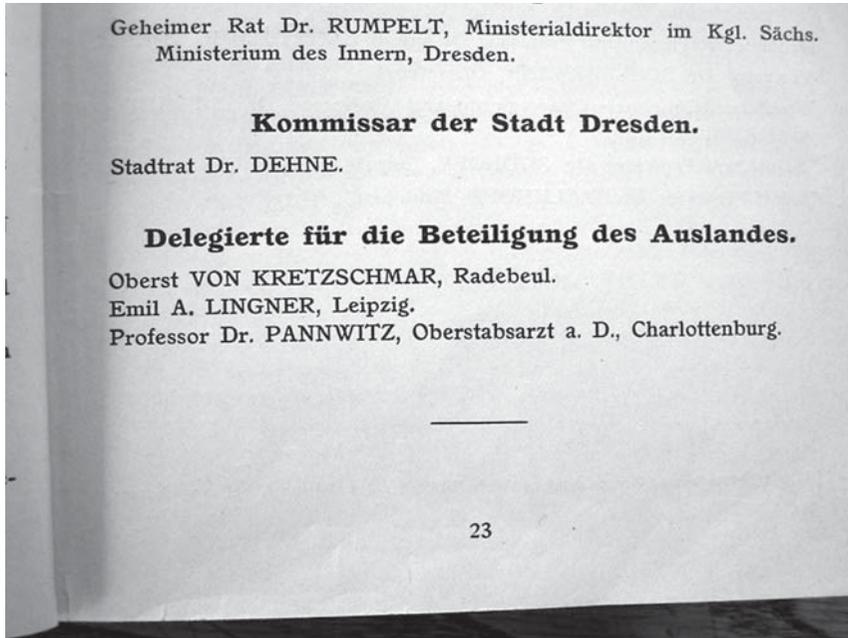
かったのは『京都・岩倉の国際関係論』という論文で、そこから、ドイツ人企業家 Karl August Lingner を主催者とする万国衛生博覧会が明治 44 年（1911 年）にドイツの Dresden で開催されたという内容である。そこではこの博覧会について次のように紹介されている。

この衛生博覧会は、1911 年 5 月～10 月まで開催され、550 万人の入場者があったという。博覧会の目的は衛生思想の普及と様々な文化圏における衛生の歴史と発展の紹介であった。主催者のリンクナー（Karl August Lingner）は、うがい薬“Odol”で成功したドレスデンの企業家で、ドレスデンの一連の保健関連施設建設にも関わっている。日本政府としても博覧会に参加することになり、平田東助（内務大臣）、一木喜徳郎（内務省書記官）、窪田静太郎（内務省参事官）らが準備委員会を組織し、日本の展示を企画した。出品物は文部省、内務省、伝染病研究所、東京衛生試験所、陸海軍および農商務省から行われた。会期中宮島幹之助（伝染病研究所）と石津利作（東京衛生試験所）がドレスデンに派遣された¹⁰⁾。

文部省が関連部局に含まれているのは衛生博覧会という名称とはなじまないようにも見えるが、全体のコンセプトの中に、「諸外国部門」があり、ドイツ以外にロシアをふくむヨーロッパの 8 ヶ国と日本、ブラジル、中国（清）の計 11 ヶ国がそれぞれのパヴィリオンで自国の衛生制度・食生活や住居・教育や歴史の概要など、狭い意味での「衛生」を超えた自国の紹介を行っているので、文部省も関係部局に入れられたものであろう。伊東忠太の設計になる日本館は（A）地形と気候、（B）住居、上水道、埋葬、（C）栄養と食品、（D）衣服と身体衛生、（E）伝染病、（F）病院、医療にかかわる職業、病気に関する統計、交通、（G）児童福祉、学校衛生、（H）医学史、（I）陸軍と海軍、野戦病院、（J）台湾の 10 セクションに分かれていた¹¹⁾。

筆者は、鷗外の日記に出てくる Lingner はこの Karl August Lingner もしくはその一族の一人で、衛生博覧会への協力要請のために日本を訪れたのではないかと推測し、それを確かめるために Dresden にあるドイツ衛生博物館を訪れ、文献調査を行った。その結果、「万国衛生博覧会公式カタログ」（Offizieller Katalog der internationalen Hygiene Ausstellung Dresden）に列挙された準備実行委員会の中に、諸外国からの参加を要請する任務を負った外交使節団が含まれており、その 3 人のメンバーのうちの一人が Emil A. Lingner であることが分かった。同博物館での調査に協力してくれた Marion Schneider 氏によると、Emil Lingner は Karl August Lingner の弟で、中国に派遣されたとのことである。日本にも足を伸ばしたのかというこちらの質問には答えは得られなかったが、ドイツからの距離を考えれば中国と日本に別の使節を送るとは考えられないので、鷗外が会った Lingner はこの Emil であって、彼が中国と日本を担当したものと断定して構わないであろう。なお同使節団には Günther という名前は入っていないので、こちらは大使館員か何かの在日ドイツ人で Lingner の案内役を務めたものかと思われる。

陸軍が協力するとなると、明治 40 年に軍医総監に昇進し衛生部医務局長に補されていた鷗外に話がまわってくるのは当然である。上に引いた日記の 5 月 14 日の記述に「北里柴三郎電話にて博覧会経費の事を言ふ。」とあるのは、伝染病研究所所長である北里がさっそく電話で相談を



公式カタログに載せられた準備委員会一覧より。最後の「外国からの参加要請のための使節団」の二人目に Emil A. Lingner の名前が見える。

してきたということであろう。北里は6月28日にも鷗外を訪ねている。北里と鷗外は2年前の明治41年に Robert Koch 夫妻が来日した際にも協力して夫妻の接待に当たっているので、この二人の協同には何ら不思議な点はないが、博覧会への協力についてやや奇異に感じられるのは次のような記事である。

- ・明治43年6月27日(月)
「文部大臣官邸に展覧会^{ママ}につきての商議会を催さる。」<35巻491ページ>
- ・明治43年7月5日(火)
「黒田清輝、新海竹太郎を招きて、Dresden に遣るべき物品の事を商議す。」<35巻492ページ>
- ・明治43年10月18日(火)
「黒田清輝、新海竹太郎、佐野昭を会同して、博覧会出品の事を商議す。」<35巻、501ページ>
- ・明治43年12月15日(木)
「池端勸業協会階上にゆきて、白馬会員の画稿を見る。明年の独逸博覧会に送遣するものなり。」<35巻506ページ>
- ・明治44年1月6日(金)

「Dresden 博覧会に出陳すべき物品を竹の台へ見にゆく。」 < 35 卷 511 ページ >

上に引いたように文部省も出品物の選定に関わっているの、6月7日に文部大臣が関係者を集めて協議したものである。なお、この日の記述では「展覧会」となっているが、書かれた時期から考えて「博覧会」のことと思われる。この文部大臣からの召集がなければ、以下の美術関係者たちとの話し合いも鷗外の越権行為となってしまう。衛生博覧会に文部省が関わっているのは上に述べたような全体のコンセプトからくるものであり、自国の文化の紹介のために何を出品するかを検討しているのであるが、なぜその担当者として陸軍軍医総監である鷗外も協力を求められたのだろうか。

ここで少し鷗外と文部省との関係に触れておきたい。周知のように鷗外は明治 39 (1906) 年 8 月に第一師団軍医部長として小倉から東京に帰ってきたが、翌年には早くも文部省と関わりをもつことになる。明治 40 (1907) 年に文部省が国家主導の美術公募展である文部省美術展覧会 (初期文展) を開催するに当たって、黒田清輝らとともにその美術審査委員会委員を委嘱されたのである¹²⁾。

続く明治 41 (1908) 年 5 月には、臨時仮名遣調査委員会委員を委嘱された¹³⁾。国定教科書の仮名遣いについては明治 38 (1905) 年に、国語調査委員会の諮問に基づいて、それまでの歴史的仮名遣いを改めて次期からは表音式仮名遣いを採用することが決定されたが、貴族院議員などから反対意見がでてきたために、明治 41 (1908) 年 5 月に文部大臣牧野伸顕が「表音式仮名遣い」派、「歴史的仮名遣い」派の双方から委員を集めた臨時仮名遣調査委員会委員を招集した。鷗外は「歴史的仮名遣い」派の委員として委嘱され、6月26日の第4回委員会で鷗外が意見を述べている¹⁴⁾。7月3日に第5回の委員会が開かれたが、その直後の7月14日に西園寺内閣に替って第二次桂内閣が発足し、文部大臣も牧野伸顕から小松原英太郎に交替する。この交替によって文部省と鷗外のつながりは一層、密なものになった。

小松原英太郎 (1852 年～1919 年) は鷗外より 10 歳年長で、外務および内務の官僚を経験した山縣系の政治家である。外務省時代の明治 17 (1884) 年 6 月から明治 20 (1887) 年 11 月まで Berlin の公使館に勤務しており、ドイツ在住の日本人の集まりである大和会の幹事も務めていたので、鷗外とはそれ以来の旧知の仲である¹⁵⁾。最終的に「仮名遣い」問題は 9 月 5 日、小松原文部大臣によって、表音式を提案した国語調査委員会諮問案が撤回される形で決着をみた。この間、8 月 20 日と 8 月 31 日の二度にわたって鷗外は小松原を訪ねている。そこで何が話されたかは日記からは明らかではないが、「仮名遣い」問題がまったく話題にならなかったとは考えられないだろう。この問題の決着がついた後の 10 月 9 日の日記には「夜小松原文相英太郎に官邸に招かる。仮名遣調査会の労を慰めんとなり」¹⁶⁾とあり、年末の 12 月 23 日には小松原文部大臣から「仮名遣会の委員たりし労を慰むとて、白斜子一匹を贈」られている¹⁷⁾。この間にも、9 月 26 日には新たに教科用図書調査委員会委員を委嘱され¹⁸⁾、秋には昨年に引き続いて「文展」の審査委員に選ばれている¹⁹⁾。小松原の宴席にもたびたび招かれており、半ば文部官僚のような趣きである。それを裏付けるかのよう、年末と年始に鷗外は直属の寺内陸軍大臣と並べて

小松原文部大臣にも挨拶に伺っている。

以上のような公私にわたる緊密な結びつきが鷗外と文部省ないしは文部大臣との間にあったので、Dresdenでの博覧会に文部省が関わるとなれば、ドイツ通である鷗外にも声がかからないほうがおかしいと言っていいほどである。ただし文部省が鷗外にどのような役割を期待したのかは明らかではない。鷗外は洋画家の黒田清輝に加え、佐野昭、和田英作、新海竹太郎といった彫刻家たちに協力を仰いでいるのであるが、衛生博覧会であるからには芸術作品としての絵画や彫刻が展示されるとは考えられない。Dresdenのドイツ衛生博物館が保存している「日本政府出品カタログ」(Katalog der von der Kaiserlich-japanischen Regierung ausgestellten Gegenstände)²⁰⁾に掲載された写真には、着物姿の女性や遊んでいる子どもたちの人物模型を展示して日本の風俗を紹介して様子や、植物図鑑にあるような精密な植物の図なども写っているので、そうした模型や絵などを制作する上での協力を上記の美術関係者たちから得たものかと推測される。既に触れたように鷗外は文展の審査委員を務めていることもあって、黒田清輝などの援助を得るのは困難なことではなかった。文展の審査委員以外にも、前年の明治42(1909)年には原田直次郎記念展のことで黒田や和田英作とは一緒に仕事をしたばかりであった²¹⁾。

明治44(1911)年に入ると博覧会の準備も終了し、日記には次のように記されている。

明治44年1月16日(月)「Dresden博覧会に出陳する品を調ふることに干渉せし軍人側の人々を蔵多家に招く」<35巻512ページ>

明治44年2月13日(月)「弥生に黒田清輝、佐野昭、和田英作、新海竹太郎を招飲す。」<全集35巻515ページ>

前者は陸軍軍医総監という立場から催した慰労会であり²²⁾、後者は文部大臣の委嘱を受けた美術造形部門責任者として美術関係者の労をねぎらったものであろう。

話がいささか先の方まで行ってしまったが、Lingnerが鷗外を訪ねて、翌年に予定しているDresden万国衛生博覧会への協力を求めた明治43年5月6日(金)に話を戻そう。この申し出に対して鷗外は協力を約束するだけでなく、9日(月)にLingnerと同伴者を築地精養軒での夕食に招待した。この時、鷗外は単に礼儀として遠来の客をもてなそうとしたのではなく、もっと個人的にDresdenやドイツについて話したいという気持ちが鷗外のなかにあったと思われる。なぜならDresdenは、後に触れるように、4年余りにわたる鷗外のドイツ滞在中で、もっとも幸福な時間を過ごしたところだからである。そして、結論を先に言えば、5月9日にLingnerと築地精養軒で会って話したことが刺激となって『普請中』が書かれたのである。決して、小堀桂一郎がいうような「若返り」のなせる業などではない。

場所を築地精養軒に指定したのは鷗外に違いないが、なぜそこを選んだのかはわからない。このホテルは前年の明治42年に、それまでの建物を取り壊して3階建32室を新築しているので²³⁾、新しくなったホテルの様子をみようとしたのかも知れない。小説では「普請中」となっ

ているのは、「改築」にヒントを得たという可能性もあろう。この頃の鷗外の記事に上野精養軒はたびたび出てくるが築地精養軒は明治42年、43年を通じてこの日が最初である。

いかなる理由でその場所を選んだにせよ、築地精養軒で話したからには鷗外はドイツあるいはDresdenの思い出にひたるだけでなく、20年前に当時の築地精養軒に滞在した「エリス」のことを思い出さずにはおれなかったはずである。このことが鷗外の分身に近い渡辺参事官とかつての恋人との再会という設定につながったのであろう。ただし念のため断わっておくが、鷗外は「エリス」の20年後としてこの恋人を描いているのではなく、別のモデルを念頭に浮かべながら『普請中』を書いたはずである。「ブリュネット」という髪の色を特別な意味を探すべきではない、と小堀桂一郎は言うが、それは単なる小堀の思い込みに過ぎず、はっきりした根拠があるわけではない。しかるべき理由があれば、その意味を探ることに何ら支障はないはずである。これについては次章で触れることにする。

次に、『普請中』の執筆に要した日数であるが、書き終えたのが5月14日(土)であることから、5月9日(月)の歓談がきっかけとなってこれが書かれたと考えるには時間が短すぎるのではないかと、という印象を与えるかもしれない。あるいは、『普請中』の漠然としたアイデアは5月6日(金)に9日の招待を申し出た時点で萌していたかも知れないが、それにしても書き終えるまで1週間しかない、これで十分であろうか。そうした疑問が出てくるのは避けられないところであるが、実はこの頃の鷗外は、公務の傍らの執筆であることを考えればその筆力に驚くしかないが、おそらく筆が速く、日常のできごとに想を得ると数日で作品に仕上げていることが珍しくないのである。

例えば「三田文学」第1巻、1号(明治43年5月1日発行)に掲載された『棧橋』は、日記によると明治43年3月8日に原稿を書き終えたとあるが、これはその三日前の3月5日に「亀井伯爵茲常、福羽子爵逸人の洋行を送りに横浜に」行った折に想を得て、伯爵の妻になりかわって送別の光景と見送る妻の心情を描いたものである。「夫」および同行者の爵位は亀井と福羽の伯爵、子爵をあて、「夫」の経歴は大学卒業と結婚の順序を入れ替えただけで、長女の誕生や式部官という身分は亀井のものである。また3月5日という日付と妻の身重は事実そのままである。5日が土曜日であるからこの週末に稿を起し、8日(火)に書き終えるという速さである。

また『普請中』の次に書かれた『ル・パルナス・アンビュラン』(明治43年5月22日脱稿)は5月20日(金)に築地三一会堂で執り行われた英国王の葬儀に列席したことを小説の冒頭に取り込んでいる。この日から書き始めたとすれば、週末の二日間で書き上げたことになる。更に、少し後の事になるが明治45年5月5日に岩崎邸で開かれた音楽会を聞きに行くとその10日後には『藤棚』が書きあげているのである²⁴⁾。いわば過冷却状態にある水に外から振動あるいは核となくものを与えると急速に氷結するように、この時期の鷗外はきっかけさえあれば作品ができあがってしまうような精神の緊張状態を保っていたかのようである。これらの例に照らしても、築地精養軒での会食がきっかけとなって『普請中』が書かれたと考えることは十分可能であろう。

Ⅲ. 鷗外と Dresden

ここで鷗外のドイツ留学における Dresden のもつ意味について触れておきたい。鷗外はドイツ留学中に四つの都市に住んでいる。Leipzig (明治 17 年 10 月 22 日～明治 18 年 10 月 11 日)、Dresden (～明治 19 年 3 月 7 日)、München (～明治 20 年 4 月 15 日) そして Berlin (～明治 21 年 7 月 5 日) である。他の三つの都市での滞在が 1 年あるいはそれ以上の長さであるのに対し、Dresden 滞在だけは半年に満たないことが目を引く。

Berlin に到着した翌日に鷗外は橋本綱常をホテルに訪ねた。橋本は翌年に松本順の後任として陸軍軍医総監・陸軍省医務局長となる人物であるが、このときは陸軍卿大山巖に随行してヨーロッパを巡行していた。橋本は訪ねてきた鷗外に次のように指示を与えた。

政府の君に托したるは衛生学を修むることと、独逸の陸軍衛生部を詢ふこととの二つにぞある。されど制度上の事を詢はんは、既に隻眼を具ふるものならでは、えなさぬ事なり。(中略)。君は唯心を専にして衛生学を修めよ。 < 35 卷 87 ページ >

二日後に橋本を再訪した鷗外は、衛生学の学修計画について、先ず Leipzig で Franz Hofmann のもとで、次いで München で Max von Pettenkofer、最後に Berlin の Robert Koch のもとで学ぶことを勧められた。鷗外はほぼ橋本の指示に従って留學生活を送ったが、そこから外れているのが Dresden である。つまり Dresden は当初の予定には入っておらず、鷗外が独自の判断で Leipzig と München の間に割り込ませた、言わば唯一お仕着せではない留學生活の場だったのである。どうしてこのようなことになったのだろうか。

鷗外が Leipzig に滞在して半年余りが経過した明治 18 年 4 月 29 日に、Dresden からザクセン軍団医長軍医監 Wilhelm Roth が Leipzig を訪れた。Roth を迎えての大学教授や軍医たちとの会食には鷗外も招かれた。Roth は日本から来たこの若い軍医のことを既に聞いていたらしく、その席で自分から親しく鷗外に声をかけてきた。そして Roth から、5 月 13 日に Dresden で行う負傷者運搬演習を行うから見学に来ないか、と誘われた鷗外はその場で応諾した²⁵⁾。鷗外が Leipzig を離れるのはこれが最初であった。

それから間もない 5 月 26 日、鷗外は全権公使の青木周蔵に会って在独中の計画の変更を申し出るため Berlin の公使館に赴いている。青木はハーグに出かけていて会うことはできなかったが館員の棚橋軍次に要件を托した²⁶⁾。それには二つあって、ひとつは 8 月 27 日から 9 月 12 日にかけて行われるザクセン軍の演習への参加の許可であった。演習が始まる二日前になってようやくその許可があり、参加することができた²⁷⁾。さらに、この演習に参加している間に公使館からの手紙が届き、10 月 13 日から翌年の 2 月 27 日まで Dresden で開かれる冬季軍医学講習への参加についてザクセン国王の許可を得たことが伝えられた。これが 5 月に青木に会いにいったときの二つ目の要件であった。秋の行われる 2 週間あまりの軍事演習への参加はともかく、数ヶ月にわたる講習を受けるとなると当然のことながら留學生活の予定に大きな変更が加えられる

ことになる。鷗外をこのように動かしたのは何だったのであろうか。負傷者運搬演習の見学がそのきっかけとなったとしか考えられないが、見学しただけでこうまで心を動かされたとは考えられない。5月12日にDresdenに向かって14日にLeipzigに帰宅するまでの間に何があったのか、日記の記述にそれを探ってみよう。

5月12日は何よりもまず初めての小旅行に心が躍動している様子が見て取れる。途中の窓外に見えたものや同行したWürzlerから教えてもらったことを何一つ書き落とすまいとするかのような詳細な記述が注意を引く。DresdenでRothを官舎に訪ねると、早速陸軍卿Fabriceをはじめとする軍の高官に紹介された。午後はGroßer Gartenの植物園と動物園を見学し、小さな子どものように楽しんでいる。翌13日は午前中に、この旅行の本来の目的である負傷兵運搬演習を見ているが、これについては「演習中少しく雨る。午前11時三十分式畢る。」としか書かれておらず、「塑像館及画廊を觀る。徳停（ドレスデン：引用者注）の画廊は世界の名画を収む。就中ラファエルロRaffaelloの童女画女は余の久しく夢寐する所なりしが、今に到りて素望を遂ぐることを得たり。」とLeipzigでは味わえなかった芸術的感動を記している。そしてその日の締めくくりは次のように書かれている。

午後五時正服を着し、軍医会に赴く。会場はブリユウル磴Bruehl'sche Terasseなる「ベルエデエル」Belvédère亭なり。亭は易北河の南岸に築ける旧砦なり。王国衛生団の軍医悉く集まる。来賓には陸軍卿、伯林衛生会長軍医正ダイクDyck徳停病院外科医長某等あり。酒酣にしてロオト氏演説す。中に今日の宴、別に遙に東方より来たれる客を見る喜あり。この人仮に我が軍団に投ぜんことを願はば、余等はそのいずれの日なるを問はず、楽みてこれを迎ふべしといふ語あり。最後に軍団の康寧を祝すとて、満堂の客三鞭酒の杯を挙げ、「ホオホ」Hoch!と呼ぶこと三たびす。〈35巻96ページ〉

この歓待を若き林太郎は身に余る光栄と受け止めたに違いない。翌日もRothは鷗外を兵舎や病院を案内してまわった。Rothは鷗外に対して最初の出会いの時から好意的であり、前日の歓待に加えての親切であった。おそらくこの日にRothは鷗外に秋の演習と冬季講習について語り、その参加を勧めたものと推測される。

この3日間で鷗外に強い衝撃を与えたと思われるのは二つあって、ひとつはDresdenという都市のもつ魅力である。歩けば小一時間で旧市街を見て回ることでできるLeipzigと違ってDresdenはエルベ川を挟んで旧市街と新市街が向き合う大都会である。しかもそれは「エルベのフィレンツェ」と呼ばれた、ザクセン王国が誇る芸術都市であり、文化の享受という点では比喩にならないくらいDresdenでの可能性は大きい。他の一つはRothのもつ人間性とRothを介して得られる社会的な広がりである。LeipzigのVogel家を中心に築かれる交友関係は親身な交流ではあっても、そこでは庶民の日常しか体験できない。Dresdenでは父親ほど年齢の違うRothが年若い友人として遇してくれ、上流社会への道をつけてくれる。Rothと鷗外は互いに引き合うものがあつたと見えるが、Rothがいなければ鷗外がDresdenに移ることもなかつ

たであろう。その意味で Roth の知遇を得て、その招きに応じて Dresden での負傷兵運搬演習を見学したことは鷗外の留学生活にとって極めて大きな転機をもたらしたといえる。以上のような経緯から鷗外は 10 月 11 日 (日) に Leipzig から Dresden に移り、3 月 7 日に München に向かうまで五ヶ月の Dresden 生活が始まった。

『独逸日記』を通読した読者の誰もが感じることは、前半と後半の際立った対照である。Leipzig では多くのドイツ人に愛されて初々しく、Dresden では水を得た魚のように生き生きとしているに対し、München ではドイツ人との交わりよりも日本人との交際のほうが多くなり、さらに、Berlin 時代になると日本人同士の煩わしい人間関係の網にからめとられている。住む都市による鷗外の生活の違いは、さながら春夏秋冬の移り変わりを見ているようである。

詳しく見ていくと Leipzig 時代の日記に出てくる名前にさほど大きな偏りはなく、強いて言えばザクセン王国第八連隊の一等軍医 Würzler が目立つ程度である。そのほかには、鷗外がいつも食事をとることにしていた近所の下宿屋 Vogel 家を通じて得られた知人たちが数多く登場して、鷗外をあちこち案内してその一人暮らしの毎日に彩りを添えている。日本人は時たま遠方から訪ねてくるか、旅程の途上で立ち寄るかであって、日常的に会っている者はいない。

次の Dresden になると登場人物は Roth と衛生司令部に奉職する三等軍医 Wilke の二人に絞られ、日本人はほとんど出てこない。Roth と Wilke はそれぞれ受け持つ役割を決めていたかのように手分けして鷗外の行動範囲を広げる。地学協会などで行われる講演会やさまざまな公的施設の見学には Roth が連れ出し、観劇や娯楽は Wilke がもっぱら引き受けるといった具合である。Dresden 滞在の主たる目的であった軍医学講習については最初の 3 日は誰がどんな講義をしたかを書いているが 4 日目になると「(10 月) 16 日。講説常日の如し。以下必ずしも記せず」とあって、以後、2 月 27 日の「この日軍陣衛生学の講筵を閉ず。是を講習会の終と為す」に至るまで日記に取り上げられことがない。その分、行動の記録はコンサートや観劇、ヴァリエテや舞踏会の模様には割かれることが増える。ヴァリエテというのは一種の寄席といえいいのだろうか、19 世紀後半にドイツの大都市に次々と作られた娯楽場で、軽演劇・音楽・曲芸など、エロチックなものも含めてさまざまな出し物を見せるところである²⁸⁾。舞踏会そのものは Leipzig でも鷗外は何度か足を運んでいるが、それはいずれも市中のダンスホールであった。それに対して Dresden の鷗外は王宮をはじめ格式ある舞踏会に度々招かれており、上流社会の一員として遇されている。ザクセン軍の軍医としてその頂点に立つ Roth の後ろ盾がなければ、東洋の小国からきた一介の留學生が王宮での新年の祝賀の儀に参列して Albrecht 国王の拝謁することなど考えられもしなかったであろう。

Dresden では、鷗外は社交界での交わりを楽しむだけでなく、美術や音楽も享受し、知的な関心の領域も広がっていった。Roth に連れられて、武器庫²⁹⁾、刑務所、製薬工場、製粉工場、上水道施設なども見学し、定期的に出席した地学協会では、その頃日本の教職を失って帰国していた Naumann が一面的な日本紹介を行ったのに反対して満座でやりこめたこともあった。Dresden における鷗外は Roth の翼に守られて若鷺のように伸び伸びと振舞っていたことが『独逸日記』を読むとよくわかる。当時の Roth は軍医として軍医制度の整備を推進すると同時に、

現在の Dresden 工科大学の前身である高等工学校 (Dresdner Polytechnikum) の衛生学教授の職にあって、後進の育成に努めていた。その中には数多くの外国からきた若い軍医も交じっていた。ドイツで書かれた Roth の評伝ではそうした外国人の一人として森林太郎の名前も挙げられている。Roth の活動は軍や学校教育に留まらず、その社会的影響力の大きさを背景に公衆衛生の普及にもつとめ、1902 年に亡くなる前年には Dresden 工科大学 (1890 年に大学に昇格³⁰⁾) に設立された公衆衛生研究所の長の職に就いている。Roth は公衆衛生への関心を早くから持っており、1883 年に既に高等工学校の会議で「衛生博物館」の設立を提言している。これは、1911 年の万国衛生博覧会の成功に力を得た Karl August Lingner が打ち出した現在のドイツ衛生博物館の構想に 30 年近く先立つものである。Roth の構想を Lingner が受け継いだと主張する根拠はないが、その地盤を整備した一人は Roth であった、と言うことは許されよう³¹⁾。

Roth のこうした多方面にわたる貢献は後年の鷗外の活躍に通じるものを感じさせる。若き日に Roth という優れた人物の薫陶を得たことが軍医であった森林太郎の人間形成に影響を及ぼしているのではないだろうか。このように Roth は公的な面で鷗外の成長を助けたのであるが、私的な面では、鷗外に日本語の手ほどきを受け、鷗外を通じて日本を理解しようとつとめるなど、身分と年齢を超えて親しく交わった。Dresden 滞在中に誕生日を迎えた鷗外のために自宅に 20 余人の客を招いて祝宴を催してくれ、鷗外が Dresden を離れるときには別れの宴で共に涙を流した。このように鷗外にとって Dresden で過ごした日々は他の都市とは一線を画した忘れがたい日々であった。

これに続く München では研究上の師である Pettenkofer と『うたかたの記』の巨勢のモデルとなった原田直二郎がしばしば日記に登場する。Pettenkofer 以外には日常的に会っているドイツ人はおらず、Starnbergersee での滞在中に知り合った数人を除けば、ドイツ人との交流は極めて稀になっている。他方で日本人との交流は原田以外にも頻繁にみられ、ドイツ人に交じって毎日を送っていた Leipzig や Dresden とはかなり様相を異にする。行動としては観劇とヴァリエテが多く、研究のことはあまり出てこない。陸軍の上司である石黒忠恵からの指示があったとみえて、日本兵食論や日本家屋論などの執筆に時間を費やしている。Naumann を論駁した『日本の実情』の執筆もこの時期である。

ドイツ生活の最後を過ごした Berlin になるとドイツ人との交際はほとんどみられず、ドイツにありながら日本にいるような交際圏の中に放り込まれている。折から Berlin にやってきた上司、石黒の相手を連日のようにさせられ、友人といえ、同期に卒業し同じく陸軍軍医になっている谷口謙であるが、明らかに鷗外はこの旧知の友を高くは評価していないのであるから、楽しかろうはずがない。Berlin 時代の日記で唯一生彩を放っているのは Karlsruhe への随行である。明治 20 年 9 月に鷗外は石黒に随行して Karlsruhe に向かった。万国赤十字社総会第 4 回大会に出席するためである。日本赤十字が総会に参加するのは初めてのことで、石黒は日本政府の代表という資格で総会に臨んだ。この総会での鷗外にあえられた役割は通訳であったが、鷗外は何度か単なる通訳を超えた活躍をし、各国の参加者から注目を浴びた。それについては石黒が官報に載せた報告でも特記している。この活躍を除けば、鷗外にとって Berlin の日々は

さほど愉快なものではなかった。実際には「エリス」との交情が窮屈な毎日に明るい彩りを添えたものと思われるが、『独逸日記』からそれをうかがい知ることはできない。

このように4つの時期を並べて比較してみると、Dresden時代が極めて稀有な人的・知的交流に恵まれた幸福な一時期であったことに改めて気づかされる。まさしく、鷗外にとって青春の故地といえは Dresden を措いてない。Lingner の訪問を受けた鷗外が、相手が Dresden で予定されている大規模な博覧会のために日本までやって来たを知って、格別な思いをもったであろうことは疑いない³²⁾。であればこそ、これをきっかけに書かれた『普請中』では、渡辺参事官とかつての恋人が過ごした思い出の場所は Dresden でなければならなかった。

ところが小堀桂一郎も指摘しているように、『普請中』を『三田文学』に掲載した初校では「ゲルトネルプラッツの芝居がはねて、ブリユウル石階の上の料理屋の卓に、丁度こんな風に向き合つて据わつてゐて」と書いてしまい、翌月号で「前号「普請中」に「ゲルトネルプラッツの芝居」と書いたのは「チエントラルテアアテル」の記憶誤であつた。ヨオロッパの記念も段々薄らいで行く。」³³⁾と訂正する羽目になった。この訂正について小堀は、これは単なる地理的整合性であつて実際にあつた情事の記憶などに基づく訂正ではない、と書いている。それはその通りであるが、München の Gärtnerplatz の劇場 (Theater am Gärtnerplatz) と Dresden の Brühl'sche Terasse を並べるわけには行かないので一方に揃えた結果 Dresden が残った、というのではない。鷗外の頭の中では Dresden が舞台という考えが最初からあつたにも関わらず、意に反してそこに Gärtnerplatz の劇場が紛れ込んでしまった。よりによって Dresden の思い出の中に München が紛れ込んだのであるからこの錯誤に気付いたときの鷗外は愕然としたに違いない。たとえ読者がその不整合に気づかなくても、鷗外にとっては到底そのままにしておく間違いではなかった。直ちに次号でそれを訂正し、「ヨオロッパの記念も段々薄らいで行く」と淋しげな感慨を漏らしたのも故なしとしない。

Dresden に München が紛れ込んだ原因として考えられるのは次の2点である。München に到着した最初の日の夜に訪れたのが Gärtnerplatz の劇場であつたことである。この劇場は現在も同じ場所にあるが、どの都市にもまして München では足繁く観劇に通つた鷗外もここに行つたのは一度だけである。ただ、それが München で最初の劇場であつたために強く記憶に残つていたのであろう。もうひとつは、後述するように女のモデルと考えられる女性と会つたのが München で、そのときの様子を思い出しながら築地精養軒での女の様子を造形したと思われることである。なお、この訂正の際に元の文の「芝居がはねて」から「芝居」という言葉を削除したのは、「芝居がはねて」と書けば、女が芝居を演じる女優であるかのような印象が強くなり、歌手という設定との間で読者が混乱することを考慮してのことであろう³⁴⁾。

ところが意外なことに、「Gärtnerplatz の劇場」の替りに入れた「チエントラルテアアテル」(Centraltheater) は実は『独逸日記』には出てこないものである。Centraltheater という名前はどの都市にもひとつはありそうな劇場名であるから、たまたま思いついたものを使つてみたということもあり得なくはないが、鷗外の Dresden への思い入れを考えるともう少し慎重に考えてみたい気がする。そこで可能性として浮かんでくるのが Dresden にあつた Centraltheater とい

うヴァリエテである。ただここは営業を始めたのが他のヴァリエテのように早くはなく1900年(明治33年)であるから鷗外がDresdenにいた頃はまだ存在しておらず、したがって『独逸日記』に出てくるはずもないのである³⁵⁾。鷗外は日本に帰ってからもドイツの文学や演劇に関する雑誌類は読んでおり³⁶⁾、そこで仕入れた消息を『椋鳥通信』で紹介しているから、そうした情報のひとつとしてDresdenでCentraltheaterというヴァリエテができたことを知っていて、それを使ったということは考えられよう。ひとつの可能性として挙げておきたい。

IV. 渡辺参事官が会ったのは「エリス」か

これまで『普請中』が書かれるに至った背景を探ってきた。築地精養軒でLingnerたちと食事をしたことがDresdenでの留学生活と「エリス」事件を思い出させたものと考えて、主としてDresdenとの関連から『普請中』を分析してきたが、その分析が一通り終わった今、「エリス」との関わりから作品をみていかねばならない。端的にいえば、渡辺参事官が相手をしている女は「エリス」をモデルとしているのかどうか、という問題である。

女を渡辺のドイツ留学時代の恋人という側面からとらえれば、そこに「エリス」を連想するのは無理からぬところであろう。しかし、それはそれはあくまでも連想であって、「エリス」をモデルにして女が造形されたのではないことは上に主張してきた通りである。この誤りは女の「現在」に目を塞いでいることに起因し、女の現在の境遇という観点から見ると、まったく別の姿が見えてくるはずである。食事を前にした二人の会話を聞いてみよう。

「一体いつどうして来たのだ。」

「おとつひ来て、きのふあなたにお目に掛かつたのだわ。」

「どうして来たのだ。」

「去年の暮からウラチオストックにゐたの。」

「それぢや、あのホテルの中にある舞台で遣つてゐたのか。」

「そうなの。」

「まさか一人ぢやあるまい。組合か。」

「組合ぢやないが、一人でもないの。あなたも御承知の人が一しよなの。」少しためらつて。「コジンスキイが一しよなの。」

「あのボラツクかい。それぢやお前はコジンスカアなのだな。」

「嫌だわ。わたしが歌つて、コジンスキイが伴奏をする丈だわ。」

「それだけではあるまい。」

「そりやあ、二人きりで旅をするのですもの。丸つきり無しといふわけには行きませんわ。」

「知れた事さ。そこで東京へも連れて来てゐるのかい。」

「ええ。一しよに愛宕山に泊つてゐるの。」

「好く放して出すなあ。」

「伴奏させるのは歌丈なの。」Begleitenといふ詞を使つたのである。伴奏ともなれば同行ともなる。「銀座であなたにお目に掛かつたと云つたら、是非お目に掛かりたいと云ふの。」

「真平だ。」

（中略）

「キスをして上げてでも好くつて。」

渡辺はわざとらしく顔を蹙めた。「ここは日本だ。」＜7巻7～9ページ＞

『普請中』は『舞姫』と違って口語文で書かれているため、女の蓮葉ともいえるコケットリーと渡辺参事官のぞんざいかつ尊大な口のきき方がきわだった対照をなし、二人の感情のすれ違いが鮮やかに表現されている。「エリス」にはおそらく見られなかったであろう、女の狎れた様子は単に年齢を重ねたことから来るのであろうか。渡辺参事官が鷗外の分身だとすれば、シャンペンの杯を手にしながら、女との距離をわざと強調するかのように「Kosinski soll leben! (コジンスキーのために乾杯の意、引用者)」という言葉が発することが、はたして「エリス」を相手にできただろうか。それは20年前の森林太郎の「エリス」に対する仕打ち以上に非情な振る舞いと言わねばならない。鷗外が明治43年の築地精養軒でLingnerたちを相手にしながら「エリス」を回想したのは間違いないだろう。だがその回想から『普請中』の舞台に呼び寄せた女は「エリス」ではなかった。ではそれは誰だったのか。

「エリス」をモデルと見ている小堀桂一郎の説に対して筆者は冒頭で次のような疑問を呈しておいた。「かつての恋人はなぜ一人で日本にきたのではなく、コジンスキーという同伴者がいるのか。しかも女と渡辺との会話から察するにこのポーランド人のことは渡辺は前から知っているようなのである。女が今は歌姫になっているのはなぜか」。

そこで思い出されるのが『独逸日記』に登場するポーランド人の音楽家と歌姫のカップルである。まずポーランド人を日記の中に追ってみよう。

明治18年8月13日。「曰波蘭人二人、一は矮軀にして寡言なり。一は美貌にして弁を好む。並に名を知らず。概して波蘭人の名はその語に通ずる者ならでは口舌に上すこと難し。」＜35巻102ページ＞

明治18年8月19日。「夜二波蘭人と水晶宮 Krystallpalast に至りて楽を聞く。この日波蘭人の名を識る。一をクペルニツク Cupernik といひ一をラツニンスキイ Lazninsky といふ。」＜35巻103ページ＞

明治18年8月20日。「微雨。午後クペルニツクの居を訪ふ。」＜同上＞

Leipzig時代の記述である。後の引用にあるように、二人とも鷗外がいつも食事をとっていた下宿屋Vogel家で知りあった仲である。Liepzig時代の日記に彼らが出てくるのはこの時であるが、Cupernikとは半年余り経ってからMünchenで思いがけなく再会する。

明治19年4月12日。「波蘭人クペルニツク Coup^マernikと邂逅す。楽人なり。かつて来貢府 (Leipzig、引用者) にあり。余と同じくフオオゲル氏の家に午餐す。今ミルラ Mirrha と呼ぶ巴里の歌妓と漫遊す。狂態想ふ可し」 < 35 卷 137 ページ >

明治19年9月23日。「またコペルニツク Cop^マernikに逢ふ」 < 35 卷 151 ページ >

名前の表記は「クペルニツク Cupernik / Coup^マernik」と「コペルニツク Copernik」が混在しているが同一人物とみて間違いないだろう。「女」の同伴者の Kosinski という名前は、鷗外が Leipzig で会った二人のポーランド人 Copernik (Coup^マernik) と Lazninsky を合成して Cosinsky とし、それを同音の Kosinski へと変化させたものであろう。それも、『普請中』の執筆に際してこの名前を作ったのではなく、以前から鷗外の頭の中には「コジンスキイ」という名前があったと思われる節がある。上に引いた明治18年8月13日の日記には「並に名を知らず。」とあるが、Vogel 家で食事を共にする仲間でありながら、名前を聞いていないというのは不自然である。「並に名を知らず。」に続けて「概して波蘭人の名はその語に通ずる者ならでは口舌に上すこと難し。」と書いているところから推測すると、おそらく二人のポーランド人を同時に紹介された鷗外は、それぞれを別々の二つの名前として記憶する事ができず、耳に残った音を頭の中で一つの名前に合成してしまったのではないだろうかと思われる。それをここで使ったのではないかと推測する。

クペルニツクが連れていた巴里の歌妓 Myrrha ももう一度、日記に出てくる。

明治19年8月18日。「晚餐後一碗の骨非を喫せんとて、東洋骨喜店 Café Orient に入る。隣房余を呼ぶ者あり。顧視すれば匈牙利の人チルチエル Zilzer なり。白面矮軀、美髯あり。美術修業は名のみにて、骨非店に居諸を送る懶惰漢なり。是より先き、余岩佐とチルチエルにこの家に会ふ。他余等の名刺を請ひ得たり。後数日巴里産の歌妓ミルラ Myrrha と相識る。ミルラ岩佐の名を聞く。驚いて曰く。かつて一白哲人に逢ふ。自ら岩佐と称す。妾に刺を贈れり。亦日本人なりと。因りて請ひてその刺を見る。真成に岩佐の物なり。」 < 35 卷 146 ページ >

残念ながら Myrrha について書かれているのはこれが全てで、髪の色や風貌について知ることはできないが、日本人になり済みたいかがわしいハンガリーの遊び人に言い寄られる Myrrha には、男の浮気心をそそるコケティッシュなものが感じられるのではないだろうか。また「巴里産の歌妓」とあるからには、「エリス」のような黄金髪よりは「ブリュネット」のほうが自然ではないかと思われるし、『普請中』の中で、食事をする部屋に案内されて二人きりになれるかと期待した女が、思わずフランス語で「シヤンプル・セバレエ」と漏らしたりするのも「巴里産の歌妓」との関連を暗示させるようにも思える。こう考えてくると、小説で女が初めて登場する場面は周到な準備のもとに書かれていることが分かる。その場面を引用してみよう。

麦藁の大きいアンスマリイ帽に、珠数飾りをしたのを被つてゐる。鼠色の長い着物式の上着の胸から、刺繍をした白いバチストが見えてゐる。ジユボンも同じ鼠色である。手にはラランの附いた、おもちゃのやうな蝙蝠傘を持つてゐる。〈7巻6ページ〉

ここに描写された女の装いは何気ないようでありながらある方向を示している。片仮名で書かれた「バチスト」、「ジユボン」、「ララン」はそれぞれ batiste、jupon、volant であろう。いずれもフランス語である。これに「アンスマリイ帽」が加わればどうみてもフランス人女性を示しているとは考えられない。しかもこれほど具体的な女性の服装、それも一般的なスカートではなくズボン姿の女性を鷗外が想像だけで描写したとは思われず、実際に見たときの様子を思い浮かべているような印象を受ける。Myrrha と München で会ったときに彼女がこんな服装をしていたのではないかと想像したい誘惑に駆られる。

築地精養軒という舞台を別にすれば、女に「エリス」を見る唯一のよりどころは、二人がドイツで知りあい、今もドイツ語で会話を交わしているということだけである。しかし、ドイツ語を話しているからといって渡辺がドイツ人ではないように、女もそれだけでドイツ人と断定することができるわけではない。一方、フランス人である Myrrha がドイツ語を話す可能性は極めて高い。ドイツで知りあったポーランド人の愛人との共通言語はドイツ語であっただろう。またドイツ時代の鷗外はフランス語はできなかつたのであるから München のカフェで鷗外と話したときも Myrrha はドイツ語を使っているはずである。これらのことから筆者は、この Myrrhaこそ渡辺参事官が会っている女、鷗外が築地精養軒に呼び出した参事官のかつての恋人のモデルであり、彼女とポーランド人の愛人との演奏旅行をドイツからウラジオストック、そして東京へと延長させたものと考えられる。

最後に残る疑問は、なぜ明治43年に、その昔 München で何度か会っただけの Myrrha が追想されたのかということである。

全集第七巻に収められた作品の最初の三つは『普請中』、『ル・パルナス・アンビュラン』そして翻訳の戯曲『飛行機』である。これら3編は掲載誌はそれぞれ『三田文学』、『中央公論』、『歌舞伎』と異なるが、発行日はすべて明治43年6月1日となっている。すでに書いたように、『普請中』が5月9日の築地精養軒での食事に触発され5月15日に書き終えており、『ル・パルナス・アンビュラン』は5月19日の英国王の葬儀から書き起こして5月22日に脱稿している。このことから考えると戯曲『飛行機』の翻訳もそれらの小説と並行して進められていたと思われる。このことのもつ意味は極めて大きい。なぜなら『飛行機』の原題は登場人物の名を冠した“Myrrha”だからである。

鷗外が翻訳の底本に使った原作“Myrrha”は1909年に出版されている。刊行後、ただちに入手したとすれば1年近くこの作品の通読と翻訳にかかわっていることになる。『飛行機』は6月1日発行の第120号から第123号まで計4回に分けて『歌舞伎』に掲載されているので、6月以降も翻訳は続いていたとも考えられるが、5月9日の築地精養軒での食事に触発されて『普請中』を書こうとした時の鷗外の頭の中では Myrrha は極めて身近な女性名であった。そのことが鷗外

に München で会った Myrrha を思い出させ、それが『普請中』の女と Kosinski に変容したという推測は十分成り立つのではないだろうか。ただし、『飛行機』のテーマや人物造型が『普請中』と何らかのつながりを持っているというわけではなく、両者は Myrrha という名前の連想において関わりをもっているに留まることは言うまでもない。

以上のように、筆者が推測する女のイメージは「エリス」ではなく巴里の歌姫 Myrrha であるが、この物語に「エリス」はまったく無関係であるかといえそうではないだろう。築地精養軒を舞台にしているからには、「エリス」を思い出さないはずがない。小説は次の二行で結ばれている。

まだ八時半頃であつた。燈火の海のやうな銀座通りを横切つて、エエルに深く面を包んだ女を載せた、一輛の寂しい車が芝の方へ駈けて行つた。<7巻11ページ>

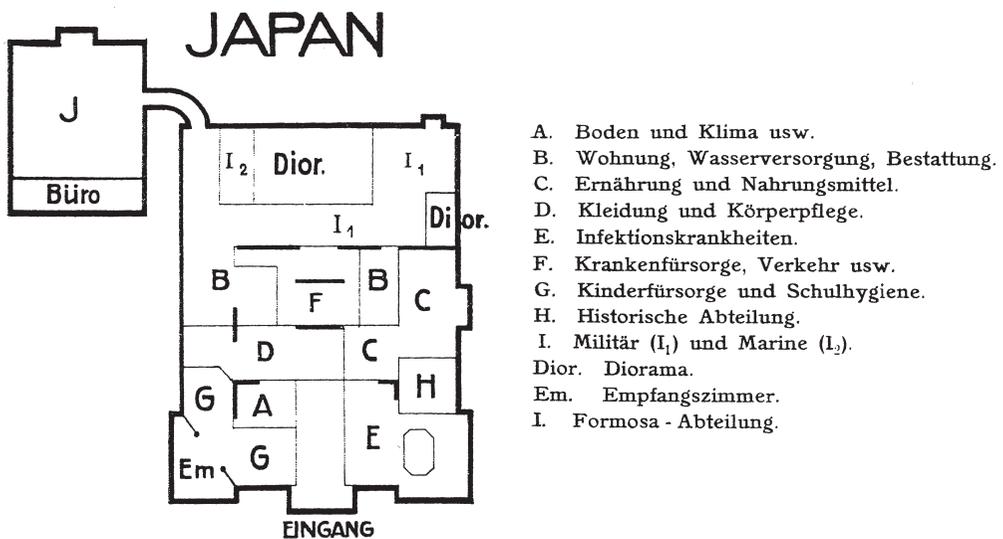
去って行く女を見ているのは誰であろうか。むろん渡辺参事官ではない。拒絶された女を同情をもって見送っているのは作者鷗外である。ここでやや唐突に作者が顔を出したことは、あるいは小説の作法からは逸脱しているかもしれないが、鷗外は自分が呼びだした登場人物に深い同情を寄せずにはおれなかったのだろう。女を見送っている眼差しは、20年前に、自分の後を追って日本までやってきた「エリス」を横浜港に見送ることしかできなかつた森林太郎のそれに重なっているはずである。

注

- 1) 「エリス」の新たな特定を行った植木哲はその著書『新説 鷗外の恋人エリス』（新潮社、2000年）の中で、明治43年1月に朝日新聞に掲載された、フランツという少年を主人公とする寓話『木精』の内容は鷗外の Berlin 時代の恋人が結婚したことを暗示しているとみている。（同書222ページ）
- 2) ドナルド・キーン / 徳岡孝夫・訳『日本文学の歴史』11巻（中央公論、1996年）、261 - 262ページ。
- 3) 三好行雄『鷗外と漱石 明治のエートス』（力富書房、1983年）57ページ。
- 4) 全集第7巻月報、11ページの阿部次郎の『普請中』評（明治43年、7月『ホトトギス』13ノ12）
- 5) 星新一『祖父・小金井良精の記』（河出書房新社、1974年）140ページ。
- 6) 小堀杏奴『晩年の父』（岩波書店、1981年）173ページ。一方、杏奴の兄、森於菟は『父親としての森鷗外』（筑摩書房、1969年）の中で、『舞姫』も『普請中』も「エリス」とは無関係な創作であるという立場をとっている（164ページ）。
- 7) 小金井喜美子『鷗外の思い出』（岩波書店、1999年）293 - 294ページ。
- 8) 山崎国紀『森鷗外』（講談社、1976年）154ページ。
- 9) 小堀桂一郎『森鷗外一文業解題（創作篇）』（岩波書店、1982年）47 - 48ページ。
- 10) 『京都・岩倉の国際関係論』（<http://www.lit.aichi-pu.ac.jp/~aha/RITSUMEIKAN2.HTM>、アクセス日2010/03/26）。
- 11) 『万国衛生博覧会公式カタログ』（Offizieller Katalog der internationalen Hygiene Ausstellung Dresden）の414 - 418ページが日本館の紹介にあてられており、AからJまでの各セクションの配置は次のようになっている。



万国衛生博覧会公式カタログの表紙



公式カタログに掲載された図版をもとに作成した各セクションの配置図

- 12) 明治40年8月13日のことである。〈35巻55ページ〉。
- 13) 〈35巻404ページ〉。
- 14) 〈35巻407ページ〉。
- 15) 大和会に出席するようになったのはBerlinに移ってからで、明治20(1887)年5月29日が最初である。
〈35巻165ページ〉。
- 16) 〈35巻412ページ〉。
- 17) 〈35巻419ページ〉。
- 18) 〈35巻411ページ〉。
- 19) 〈35巻412ページ〉。
- 20) 「日本政府出品カタログ」も上述の「万国衛生博覧会公式カタログ」も「カタログ」と称してはいるものの、今日われわれがその言葉から思い浮かべる展覧会の図録のように図版を中心としてそれに説明を加えた冊子ではなく、詳細な記述が中心の大部の報告書ないしは説明書のような書物である。言葉の軽さを気にしないのであれば「ハンドブック」あたりが実体に即していよう。
- 21) これは原田の遺児の希望を受けて没後10年を機に、遺作を集めた展覧会を開催し画譜の作成しようというもので〈35巻447ページ〉、鷗外が発起人代表として趣意書を作成し11月28日の記念会で挨拶をしている。
- 22) この後で、鷗外は気付いたことがあったらしく、明治44年1月23日(月)「内閣統計局にゆきて、独逸博覧会に送るべき統計表を訂正す。」〈35巻513ページ〉とある。
- 23) <http://www3.ocn.ne.jp/~kyokyo/seiyoken.htm> (アクセス日2010/03/26)
- 24) この小説でわれわれは主人公五条秀麿のドイツ留学時代の知り合いとしての渡辺参事官と再会することになる。
- 25) 〈35巻94ページ〉。
- 26) 〈35巻97ページ〉。
- 27) この演習で鷗外は von Bülow の娘 Ida と知りあいになり、それがドイツ三部作のうちのひとつ『文づかひ』に使われる。そこでは人物造型や風景描写など『独逸日記』の中の多くの記述が小説で生かされている。
- 28) 『舞姫』のエリスが踊っていたのはヴィクトリア座とされているが、これもBerlinに実在したヴァリエテである。
- 29) 現在は軍事博物館になっている。
- 30) Dresden in der Gründerzeit, S. 69, Dresdner Hefte 99 (Dresdner Geschichtesverein e.V. 2009)
- 31) http://saebi.isgv.de/biografie/Wilhelm_August_Roth_ (1833-1892) (アクセス日2010/8/27)
- 32) August Lingner は Dresden の在住であるが、弟の Emil は注11の公式カタログによればLeipzigに住んでいた。これはこれで鷗外にとっては緑の深い街である。
- 33) 〈第7巻610ページ〉。
- 34) 実際、全集7巻月報に再録された『三田文学』の「新刊批評」では、「普請中」には独逸の女優が出て来る、と書かれている。
- 35) Günther, Ernst : Geschichte des Varietés, S.139 (Henschelverlag, Berlin, 1981)
- 36) 例えば、明治42年4月8日の日記には、ある人から劇作家Julius Babの住所を聞かれて、最新のTheaternalmanach(『演劇年鑑』)で調べて答えたことが書かれている。〈35巻436ページ〉

参考文献

- 植木哲『新説 鷗外の恋人エリス』(新潮社、2000年)
ドナルド・キーン/徳岡孝夫・訳『日本文学の歴史』11巻(中央公論、1996年)
三好行雄『鷗外と漱石 明治のエートス』(力富書房、1983年)
星新一『祖父・小金井良精の記』(河出書房新社、1974年)
小堀杏奴『晩年の父』(岩波書店、1981年)
森於菟『父親としての森鷗外』(筑摩書房、1969年)
小金井喜美子『鷗外の思い出』(岩波書店、1999年)
山崎国紀『森鷗外』(講談社、1976年)
小堀桂一郎『森鷗外—文業解題(創作篇)』(岩波書店、1982年)
Günther, Ernst : Geschichte des Varietés, S.139 (Henschelverlag, Berlin, 1981)
Dresden in der Gründerzeit, S. 69, Dresdner Hefte 99 (Dresdner Geschichtesverein e.V. 2009)

Offizieller Katalog der internationalen Hygiene Ausstellung Dresden
Katalog der von der Kaiserlich-japanischen Regierung ausgestellten Gegenstände

『京都・岩倉の国際関係論』(<http://www.lit.aichi-pu.ac.jp/~aha/RITSUMEIKAN2.HTM>、アクセス日
2010/03/26)

<http://www3.ocn.ne.jp/~kyokyo/seiyoken.htm> (アクセス日 2010/03/26)

[http://saebi.isgv.de/biografie/Wilhelm_August_Roth_\(1833-1892\)](http://saebi.isgv.de/biografie/Wilhelm_August_Roth_(1833-1892)) (アクセス日 2010/8/27)